

2017/08/27

「あとの者が先になり、先の者があとになる」

天の御国は、自分のぶどう園で働く労務者を雇いに朝早く出かけた主人のようなものです。彼は、労務者たちと一日一デナリの約束ができると、彼らをぶどう園にやった。それから、九時ごろに出かけてみると、別の人たちが市場に立っており、何もしていないでいた。そこで、彼は那些人たちに言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。相当のものを上げるから。』彼らは出て行った。それからまた、十二時ごろと三時ごろに出かけて行って、同じようにした。また、五時ごろ出かけてみると、別の人たちが立っていたので、彼らに言った。『なぜ、一日中仕事もしないでここにいるのですか。』彼らは言った。『だれも雇ってくれないからです。』彼は言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。』こうして、夕方になったので、ぶどう園の主人は、監督に言った。『労務者たちを呼んで、最後に来た者たちから順に、最初に来た者たちにまで、賃金を払ってやりなさい。』そこで、五時ごろに雇われた者たちが来て、それぞれ一デナリずつもらった。最初の者たちがもらいに来て、もっと多くもらえるだろうと思ったが、彼らもやはりひとりのデナリずつであった。そこで、彼らはそれを受け取ると、主人に文句をつけて、言った。『この最後の連中は一時間しか働けなかったのに、あなたは私たちと同じにしました。私たちは一日中、労苦と焼けるような暑さを辛抱したのです。』しかし、彼はそのひとりに答えて言った。『友よ。私はあなたに何も不当なことはしていない。あなたは私と一デナリの約束をしたではありませんか。自分の分を取って帰りなさい。ただ私としては、この最後の人にも、あなたと同じだけ上げたいのです。自分のものを自分の思うようにしてはいけないという法がありますか。それとも、私が気前がいいので、あなたの目にはねたましく思われるのですか。』このように、あとの者が先になり、先の者があとになるものです。』（マタイ 20:1-6）

■価値観

イエス様は、ぶどう園のたとえを通して、神の国のイメージを教えてくださいました。この話を聞くと、多くの方は、労働時間が異なるのに賃金と同じなのはおかしいのではないかと、訴えている人のほうが正しいのではないかと思うのではないのでしょうか。つまり、私達は、聖書の価値観とは正反対の価値観で生きているのです。このたとえを通して、神様が最も伝えたいことは、「私達の価値観は間違っている」ということです。例えば、私達は弱さはダメなものだと思っているので、自分の弱さを隠して生きようとします。しかし、神様は、弱さは宝であり、弱い者を見下してはならないと教えています。

イエス様は弟子達に、「うわべで人をさばいてはならない」と繰り返し教えておられます。これは裏返すと、私達はうわべで物事を判断する価値観を持っているということです。私達は、いったい、どのようなうわべで人を判断してしまっているのでしょうか。

1. 行い

この世界にある様々な規則やルール、「〇〇でなければいけない」という制約のことを、律法と呼びます。人々は、その律法にどれだけ従えているか、到達できているかによって、立派な人かどうか、その人の価値を判断しています。

2. 能力

頭がいい、足が速いなど、互いの能力を比べあって、人の価値を判断しています。

3. 容貌

見た目の美しさ、素晴らしさで、互いの姿を比べ合って価値を競っています。

4. 富

車、家、財産などの持ち物で人を判断します。幼い子どもでも、新しいゲームやおもちゃを持っていることに素晴らしい価値があるように感じるものです。

5. 肩書き

職業や立場、出身大学などに、人の価値を見出しています。

これらが「うわべ」です。イエス様は、これらのもので人を判断してはいけないと言われました。

その人が何をしたのかという成果を見て人を判断することを、成果主義と言います。私達は幼いころから、「良い成果を出したらほめてあげよう」という成果主義による賞罰教育を受けてきました。実は、これこそが私達を苦しめる根源となっています。なぜなら、この価値観は競争を生み出し、その結果、嫉妬や怒りが生じ、そこからいじめや差別が生まれ、それがエスカレートすると殺人にまで至ります。すべての犯罪や苦しみは、元をたどると、すべてうわべで人を判断する価値観に行きつくのです。

この価値観の中で私達は、自分のほうが上だという上下関係を築いて安心しようとするようになりました。こうして家族でも政治でも、すべての対人関係の中で、どちらが偉いかという上下関係を巡って権力争いが起きているのです。弟子達も、常に、誰が偉いかを競い合っていました。

しかし、自分を安心させようとする、この誤った価値観こそが、私達を苦しめている根源なのです。

■神の国の価値観とは

人は、神のいのちを吹き込んで造られたと聖書にあります。神と一体となって生きるように、神様は、ご自分の一部で人を造られたのです。つまり、人は、神なしでは生きられないように造られた存在なのです。

ところが、悪魔が入り込んで、神と人との関係を壊してしまいました。その結果、私達の体は朽ちるものとなり、神の姿が見えなくなってしまいました。神なしでは生きられないという弱さを持った人間は、自分の弱さに耐えられず、その姿を恥じ、自分の姿を拒否して、弱さを隠して生きるようになりました。

しかし、私達のからだがどのような状態になっても、魂が神のいのちで造られている事実は変わりません。私達の魂は、神のいのちと等しい価値を持っているのです。

私達は、大きな神の体を構成するパズルのピースなのです。きちんと収まるとキリストの体が完成する、誰もが神様にとって必要なピースです。神の目からすると、私達はすべての者が等しく価値がある存在です。これが神の国の価値観です。神の国の価値観に、上下関係はありません。すべてが等しく横の関係です。誰かが偉いということはなく、互いが互いを生かすためのピースなのです。イエス様は、このような横の関係を築くために、この地上に来られました。ですから、私達のことを友と呼んでくださったのです。

私達は魂が見えないために、魂を覆っているうわべを見て、罪を犯し、苦しんでいます。イエス様は、私達のこの価値観が間違っていることを教えるために、次のように言われました。

「そのとき、弟子たちがイエスのところに来て言った。「それでは、天の御国では、だれが一番偉いのでしょうか。」そこで、イエスは小さい子どもを呼び寄せ、彼らの真ん中に立たせて、言われた。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、入れません。だから、この子どものように、自分を低くする者が、天の御国で一番偉い人です。」(マタイ 18:1-4)

ここで「子ども」と言われているのは、3～4歳の幼児と想定できます。これらの幼子は私達とどこが違うのでしょうか。私達は幼子から何を学べるのでしょうか。

■子どものようにとは

1. 自分の弱さを知っている

この年代の幼子は、まだ自分の弱さを隠すすべを身に着けていません。弱さとは、神なしでは生きられないということです。弱さをそのまま見れば、恐れを敏感に感じます。人は、弱さがあるがゆえに神に祈るし、神と共に生きていくのです。

2. 神を素直に信じる

子どもは、ありもしない話ですら容易に信じます。それは、弱さがあるからです。神様が幼子に学べと言われたのは、自分の弱さを隠さないからです。信じるということは、自分の弱さを隠さないということなのです。

3. 横の関係を築こうとする

大人は、初対面の人と会うと、必ず上下関係を考えます。しかし、子どもは敬語を使おうなどと考えないし、上下関係など考えません。すべて横の関係で考えるのです。

イエス様は、この子たちの価値観が正しいと言っておられます。私達が幼子から学ぶべきことは弱さです。弱さを隠さないことなのです。私達は、弱さを恥だと思って隠そうとし、立派なうわべで隠すと、周りから「すごいね」と言われるものです。こうして、そのうわべを自分だと思いつまむようになりました。こうして、互いのうわべを見て競争し、苦しんでいます。これに終止符を打つには、弱さをどう扱うかを変えなければなりません。イエス様は、私達の価値観を変えるために、ご自身も、死ぬべき体という弱さ（制約）を持ってこの地上に来られました。そうすることで、弱さに対する私達の考えを変えようとなされたのです。

■弱さは罪ではない

イエス様は、荒野でサタンの誘惑にあった時、富をあげると言われても、人々からの賞賛をあげると言われても、それを否定し、富やうわべで弱さを隠さないことを示してくださいました。これは、弱さと罪は別物だということを示しています。弱さゆえに罪を犯してしまうため、弱さは悪いものだと思ってしまうがちですが、決してそんなことはありません。弱さとは、神なしでは生きられないことのしるしであり、なくてはならない宝です。

ある時、目の不自由な人を見て、体の弱さは罪の罰だと考える弟子達に、イエス様は、その間違いを正して軌道修正し、弱さとは神の栄光が現れるためのものであり、罪の罰ではないと教えられました。また、弱さは恥ずかしいものではないと教えるために、ご自身が十字架に架かる前、苦しみ悶えて祈る姿を弟子達にお見せになりました。

私達は、自分の弱さを隠そうとばかりして、向き合おうとしません。自分の苦しみを隠そうとして、反抗したり、怒ったり、別の形で表現してしまいがちです。しかし、イエス様は、弱さは素晴らしいものだと教えるために、ご自身のありのままを見せ、弱さとは、神によって初めて解決するものだと教えられました。

あなたも弱さゆえに神に祈ることができる、これがイエス様の教育です。弱さがあるからこそ、神様に祈り、神様と一つになって生きることができるのです。

イエス様は、弱さの象徴である肉体の死を持って、十字架に架かりました。そして、よみがえり、神によって生かされることを教えてくださいました。私達は皆、肉体の死という制約を受けており、最終的にすべての人がそれに飲み込まれてしまいます。ですから、この地上でのうわべで、障害者や健常者という区別をするのは、愚かなことです。すべての人は、肉体の死という弱さがあるがゆえに、等しく神を必要とする存在です。神の目に、障害者はいません。

肉体の死は、すべてのものを無にする最大の弱さです。しかし、この弱さがあるからこそ、私達は神と一つになって生きることができるのです。

このことを教えるために、イエス様は幼子から学ぶように言われたのです。

「あなたがたはこの小さい者達を一人でも見下げたりしないように気をつけなさい。」

(マタイ 18:10)

小さい者の弱さを見下げてはいけません。それは誰もが持っている弱さであり、あなたの中にもあるものです。この弱さゆえに、神に祈ることができ、神と一つとなって生きることができるのです。弱さを見下す時、あなたは神から離れ、独立した生き方をするようになります。これが罪です。

私達の間違った価値観は、弱さに対する間違った対応から始まっています。パウロは、弱さは宝だと知って生き方が変わりました。自分の弱さを誇り、生きていきましょう。